

助成事業

助成事業は、子ども支援に取り組む団体への助成を通じて子どもたちを支援する事業です。

志を同じくする方々と共に、3つのテーマに取り組んでいます。



支援領域

困難な状況でもよりよい学びができることを目的に、教科学習だけでなく、体験学習や文化的な学びも、また、直接的な学習支援だけでなく、学び以前の課題まで広く支援対象としています。

経済的困難を抱える子どもの学び支援例



重い病気を抱える子どもの学び支援例



非資金的な支援

助成団体の皆様が、助成終了後も事業を継続し、子どもたちを支援し続けられるよう、同じ思いの人をつなぐ・話す・インプットの機会をつくる伴走支援を行っています。

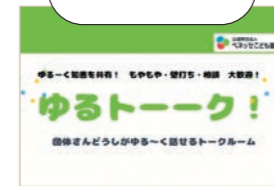
団体をつなぐ

交流会



▲活動中の団体が分野別に集まる交流会。1泊2日で、取り組みやノウハウなどを共有します。

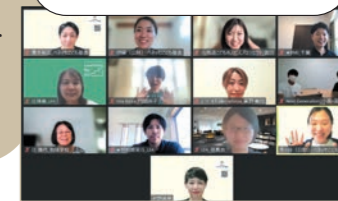
情報交換会



▲オンライン開催の情報交換会。任意参加で、気軽に相談ができます。

学びの場をつくる

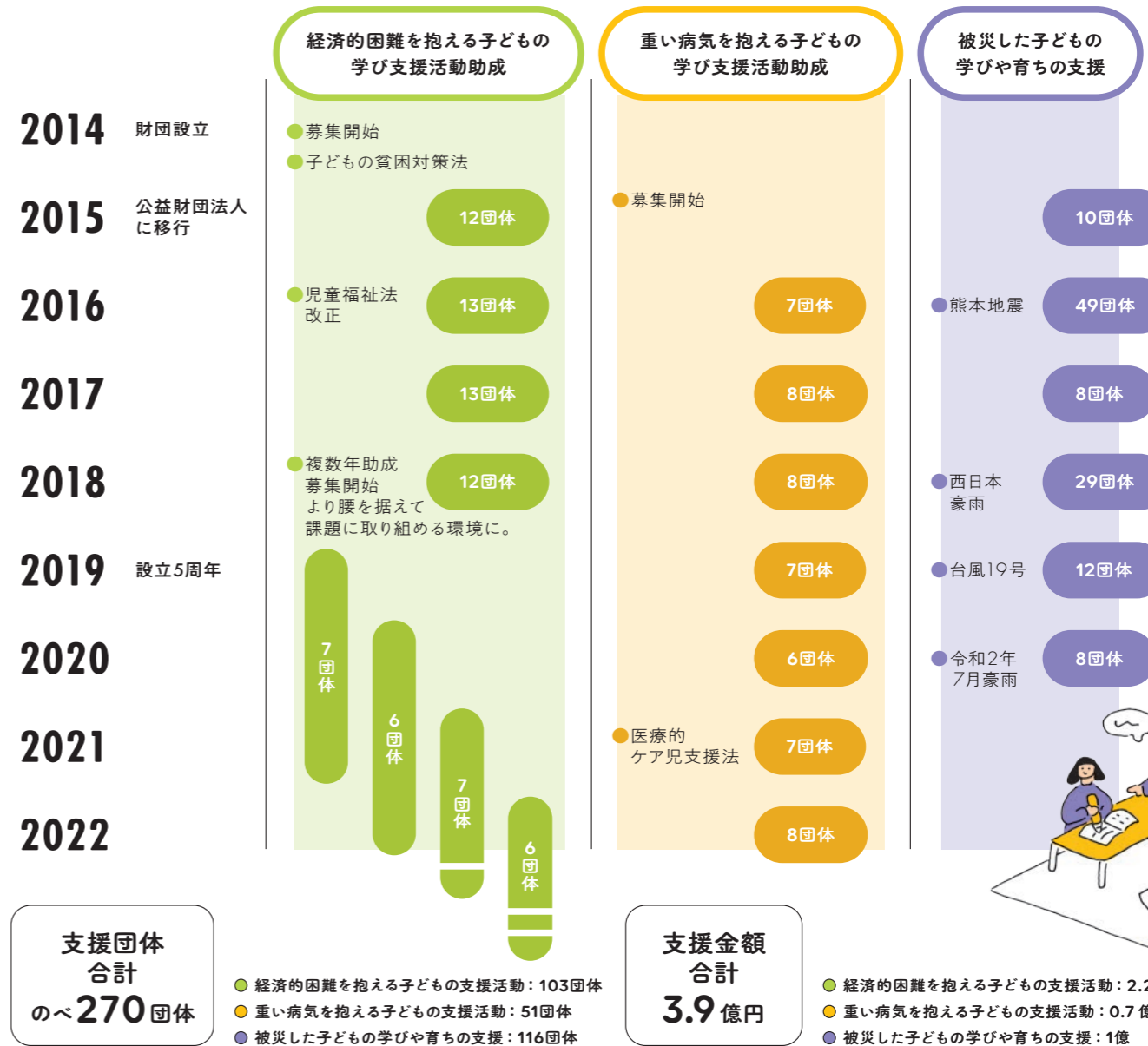
研修・ワークショップ



▲22年度事業評価研究会の様子。専門家を招いての研修やワークショップを実施。参加は希望制です。

助成のあゆみ

2015年に公益財団法人に移行してから7年間、3つの分野で助成を実施してきました。次々と変化する子どもたちの学びや育ちの課題に、多くの団体とともに取り組んできました。



支援団体合計のべ270団体

- 経済的困難を抱える子どもの支援活動：103団体
- 重い病気を抱える子どもの支援活動：51団体
- 被災した子どもの学びや育ちの支援：116団体

支援金額合計 3.9億円

- 経済的困難を抱える子どもの支援活動：2.2億
- 重い病気を抱える子どもの支援活動：0.7億
- 被災した子どもの学びや育ちの支援：1億

経済的困難を抱える子どもの学び支援

- 子どもの貧困 約7人に1人^{※1}
- 高等学校の中途退学者 約4万人^{※2}
- 社会的養護児童 約4万2千人^{※3}
- 外国ルーツの子ども 約13万人^{※4}

いわゆる「子どもの貧困」の社会的認知が広まる中で、近年は子どもたちのための安心安全な居場所やこども食堂、学習支援活動などが増えてきました。

このような活動をきっかけに、子どもが様々な学びや体験に触れられたり、より専門的な支援につながられるケースも増えてきています。ただ、外国ルーツの子どもや社会的養護の子ども、また高校生年代以降の支援が依然として不足しています。

※1 出典：令和3年子供の生活状況調査の分析（こども家庭庁） 出典：2019年国民生活基礎調査（厚生労働省）
 ※2 出典：令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（文部科学省）
 ※3 出典：令和5年4月5日 社会的養育の推進に向けて（こども家庭庁）
 ※4 出典：令和4年度 外国人の子供の就学状況等調査（文部科学省）

経済的な困難を背景とした子どもの学びや育ちの課題に対して、支援団体の事業基盤の強化や新たな事業へのチャレンジなど、中長期視点で課題に取り組む団体の活動に対して、最大3カ年の助成を実施しています。



PICK UP

高校生年代の子ども・若者への学び支援

現状と課題

支援が途絶え孤立する高校生・若者世代

高校生年代以降の子どもや若者は、義務教育でないことから、家庭が困窮状態にあっても自助を求められる傾向にあり、アルバイトや、家族のケアにも奔走せざるを得ない状況から、学校生活が満足に送れず、高校を中退するケースも多く見られます。

また学習内容だけでなく進路や就職など、支援の専門性が高くなっていくことから、担い手が限られ、支援者が足りていないという課題もあります。

さらに、子ども・若者自身も、学校等で「怠けもの」と見られてきたり「どうせ自分ではできない」と諦めを繰り返した経験から、意欲そのものが低下（学習性無力感）し、効果的な支援につながらず孤立するケースも多く見られます。



アルバイトに奔走し、学校生活が満足に送れない



「どうせ自分ではできない」と諦めを繰り返す

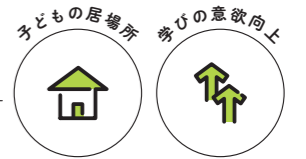
取り組み

高校生・若者の目線で、自立を見据えた学びのサポートを

学校・家庭以外の安心して自分を出せる居場所や、自分らしい未来に向けての一步を、子ども・若者目線で歩んでくれる大人とともに、社会とつながるスキルと自信を育む支援モデルが広がっています。



特定非営利活動法人 サンカクシャ



自分の興味から始める若者の居場所

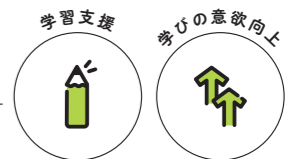
特定非営利活動法人 サンカクシャは学ぶことや人と接することなどに意欲のない、学習性無力感を感じている若者に対して、支援を届けていくためのモデルとなる事業の開発を行っています。

安心できる居場所で、動画編集、アート、フットサルなど各々の「好き」から「部活動」をつくり、人とつながり活動することで少しずつ成功体験を得て、次の一步をなんとか踏みだそうとする若者が増えています。



「部活動」を通して様々な大人と交流

認定特定非営利活動法人 CLACK



ITの力で困難を抱える高校生に“自走”の力を！

認定特定非営利活動法人 CLACKは、経済的・環境的に困難な状況にある高校生を対象に、無料プログラミング学習支援を対面で行っています。

学校の学びに苦手意識のある生徒でもITへの小さな興味があれば、大学生や社会人エンジニアが挫折しないよう学びをサポートするだけでなく、多様な社会人に出会う場も提供し、自分の人生を切り開くスキルと自信を育てています。

2022年度は支援モデルを確立し、大阪から、東京へと拠点を拡大。そして今後は地方への展開を模索していきます。



参加者の個性やキャリア観をふまえてサポート

Check

各団体の活動内容はベネッセこども基金サイトからご確認いただけます。



社会的養護のもとにある子どもたちの学び支援

現状と課題

コロナ禍における 児童養護施設の子どもの学びの現状

児童養護施設は、虐待などを理由に保護者と離れて暮らす子どもたちを養育する施設です。家庭に近い環境で生活を支えています。学習サポートまで手がまわらない現状があります。

- 1 **子どもたちが学びに向かうところではない施設の現状**
生活習慣が整っていない子どもも多く、トラブルも頻発。少ない職員数で多くの子どもたちを見るのは大変。学習支援どころではない施設も多い。
- 2 **慢性的な施設職員の不足**
欠員がでても施設に採用や広報予算がない。施設に興味のある学生が検索しても、子どもたちの様子や給与面など、求めている情報に到達できない。
- 3 **オンラインでの学びも遅れがち**
個人情報の問題やトラブル防止のためスマホやパソコンの使用に制限をかける施設も多い。コロナ禍でオンラインの学びが広がる中、施設では対応が遅れた。



取り組み

「チャボナビ」を活用した 施設職員の充足による学習サポートの体制づくり

学びに向かう以前の施設体制を改善するため、求職者と施設をマッチングする社会的養護総合情報サイト「チャボナビ」の認知拡大に力を入れました。

特定非営利活動法人 チャイボラ

施設職員の充足とICT活用で施設の子どもの学習サポートへ！

- 1年目(2020年度)
出張授業でチャボナビの登録者数を増やす
大学や専門学校など資格養成校への出張授業を通して、学生たちに施設の子どもの現状や職員の現状を伝えた。チャボナビの登録者数の増加につながった。
- 2年目(2021年度)
活動エリアの拡大とコロナ禍でのオンライン支援
チャボナビの成果の評判が広がり、関西など東京以外の施設の登録も増えた。コロナ禍でオンライン説明会に移行し、施設のオンライン支援の依頼も増加した。
- 3年目(2022年度)
ICTを活用した学習モデルづくり
施設の学習状況調査はコロナ禍で延期したものの、ICTを活用した学びモデルのトライアルを実施。自己肯定感の向上につながる検証結果も出はじめている。

支援基盤整備 学びの意欲向上

保育士等養成校への出張授業の様子

チャボナビ

申込受付中！
児童養護施設などのオンライン見学フェア

全国76施設が参加するイベント開催中！
11月13日(土) 13:00~15:30

interview

チャイボラの 3年間の歩みを振り返る

特定非営利活動法人チャイボラ
代表理事
大山遥さん



会社員時代、教材を寄付しようと児童養護施設へ問い合わせをした際に職員不足の現状を知り、施設職員になるため退職を決意。現在は非常勤の職員として児童養護施設で働きながら、施設職員の確保と定着をサポートする事業を全国に展開している。

チャボナビの認知拡大と コロナ禍での取り組み

——3年前、児童養護施設の子どもの学び支援に、施設職員の不足解消から取り組まれました。

大山さん 児童養護施設に限らず社会的養護施設全般に言えることですが、圧倒的な職員不足と高い離職率が課題です。私も施設職員になってわかったのですが、子どもの学習サポートをしたくても、学習以前の問題がありました。職員ひとりでは何名もの世話をしますが、他人同士の集団生活でトラブルも多く、無事に就寝するまで気が抜けません。

——施設職員を充足させることが子どもの学び支援の体制づくりにつながると考えられたのです。職員不足の原因は何でしょうか？

大山さん 情報発信の不足です。施設での仕事に興味ある人がネットで検索しても、施設にはホームページがないところもあり、子どもたちの様子や給与など、求めている情報にたどりつけないのです。施設には採用や広報の予算がないことが原因だとわかりました。

——それで社会的養護総合情報サイト「チャボナビ」を開発されたのですか。

大山さん はい。施設で働きたい人が必要な情報にたどり着けることを目的に「チャボナビ」を作りました。最初は都内の一部の施設だけでしたが、今は全国の約3分の1の児童養護施設が登録されています。

——採用や広報の予算がなくても、施設が情報発信できるよう工夫されたとお聞きました。

大山さん 施設の情報を掲載するだけでなく、大幅改定を行い管理画面から施設が投稿できるようにしました。例えば、日々の子どもの様子をブログでアップできるようにしました。採用や広報の予算はなくても、チャイボラを通して求人に必要な情報を発信できます。

——チャボナビのPV(サイトの閲覧された数)も12万と、3年間で随分増えましたよね。

大山さん 当初から大学や専門学校に出張授業することに力を入れていました。施設の実情や仕事のやりがいを伝えるためです。それがチャボナビの認知拡大や登録者の増加にもつながりました。施設の採用にもつながり、2年目には福祉新聞などのメディア、3年目には厚労省の社会的養護魅力発信等事業などに採択されて、一気に伸びました。東京以外の施設からの登録が増えたのも、その頃からです。

——コロナ禍での影響は？

大山さん 学校が休校になってからは大変でした。ただでさえ職員不足なのに、大量の離職者がでた施設もありました。子どもたちは終日施設にいますし、クラスターも発生しました。学習状況の調査を計画していたのですが、タイミング的に難しいと判断しました。ただ複数のICT教材でトライアルを繰り返すなど、関係性のある施設でのスモールテストはしていました。

——3年間で終わりました。これからどのような取り組みをされますか。

大山さん これからも施設の子どものためによりよい環境をつくっていきます。職員の充足に留まらず、学習状況調査を実施した上で他の団体や施設と連携して学びモデルに取り組み、子どもたちの声を聞きながら拡大していきます。最近の体験学習では、社会課題に取り組むことで子どもたちが自分たちを客観視したり、自己肯定感が向上することが確認できました。検証を重ねて、学びの意欲が低い子どもたちの自己肯定感を高めていきたいです。

重い病気を抱える子どもの学び支援

重い病気により長期入院や長期療養をしている子どもに対して、学びに取り組む手助けや意欲を高めるサポートをしている団体の活動を助成しています。

難病の子ども
約12.4万人^{*1}

医療的ケア児
約1.8万人^{*2}

病気を理由に長期欠席した
小中学生約5.7万人^{*3}

医療の進歩とともに助かる命が増えた一方で、長期的な治療や医療的なケアが必要な子どもの学びや体験の機会が十分ではありません。

困難を抱える子どもの学びの必要性を多くの人々に知っていただくこと、また困難さの解決に向けた問題提起やユニークな視点を含んだ支援策、同じ課題に取り組む人たちが参考にできるモデルとなる活動を全国に普及させていくことが重要です。



※1 出典：「小児慢性特定疾病児童とその家族の支援ニーズの把握のための実態把握調査の手引き書令和4年3月」（厚生労働省）
 ※2 出典：「医療的ケア児者とその家族の生活実態調査 令和2年3月」（厚生労働省）
 ※3 出典：「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」（文部科学省）

PICK UP

学びの支援が意欲につながる

現状と課題

つぎつぎ現れる不安

突然病気を発症した子どもは、ショックを受けたままつらい治療を開始。慣れない入院生活に対するストレスや、見た目の変化に対する不安など、心身ともにつらい状況になります。入院生活や療養生活が長くなれば、学校生活に戻れるのか、学校の勉強の遅れはカバーできるのか、進路はどうなるのか、など次への不安も出てきます。治療もちろん大事ですが、子どもが子どもらしくその時期を過ごすためには、たくさんの人との関わりや、学びや遊びの体験が重要です。たのしい気持ちを持つことが、治療に立ち向かう意欲も育てます。



取り組み

子どもたちの気持ちや声に寄り添った学びのサポートを

病気に立ち向かう日々も、子どもたちにとってはかけがえのない日々。充実させるための支援が広がっています。



一般社団法人チャームングケア

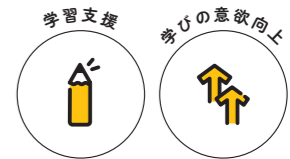


病気のときだっておしゃれしたい！

アピアランス（外見）のケアは、子どもたちの生活の質を上げ、病気に立ち向かう意欲をもつために大事な要素です。そこで、病気のことでなく、子どもたちの気持ちを理解し支えていく人材を育成する「チャームングケア研修」を実施。子どもが講師になることで、本当はどうしてほしいのかという当事者の声を届けられるだけでなく、重い病気を経験した医療体験をプラスに変え、子どもの自己肯定感を高めるきっかけにもなります。



公益社団法人 日本環境教育フォーラム ジャパンGEMSセンター



いつでもどこでも体験的学びにアクセス！

カリフォルニア大学で開発された科学・数学の体験学習プログラムGEMS（ジェムズ）。体験をベースにした科学・数学学習によって、基礎学力や自分で考え、学ぶ姿勢を育てられる内容です。これをもとに、病児やきょうだい児が、病室でも楽しめる身近な素材での実験やゲームを動画コンテンツで紹介。楽しいだけでなく、さらに深く考えられるような内容も用意し、「面白い！」「もっとやりたい」気持ちを刺激します。

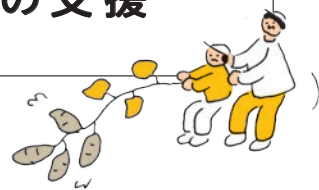


Check

各団体の活動内容はベネッセこども基金サイトからご確認いただけます。



こどもホスピスに滞在する子どもたちへの支援



現状と課題

病気とともに生きる子どもたちが
 学び育つ場所は、
 学びや育ちを保障する制度がない

1

子どもの課題

- 成長機会の損失：病気や障がいのため、やりたいことができない
- 社会参画機会の損失：友達と交流ができない
- 親から自立できない（自立機会の損失）

2

保護者やきょうだいの課題

- 手を離せない介護に追われながら、心身ともに背負いこんだり我慢してしまう
- 安心してつろぐ場所や時間がない

取り組み

「こどもホスピス」をつくることで
 学びや育ちを保障する

ホスピス＝がん患者さんの病院と思われがちですが、こどもホスピスは病院ではなく、子どもの学びや育ちを保障し、保護者やきょうだいにも安らぎをもって過ごしてもらおう「おうち」です。



認定特定非営利活動法人
横浜こども
ホスピスプロジェクト

学びの意欲向上

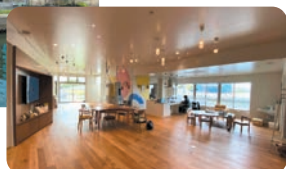


病気への理解支援



子どもや家族と
 地域コミュニティをつなぐ
 ハブとしての役割をめざす

病気とともにある子どもたちであっても、遊びたいし、学びたい。そんな当たり前の願いを地域や人との交流を通してかなえるモデルづくりに取り組みました。子どもたちが、保護者やきょうだいと一緒に安心して過ごせる場所を、つくりあげています。



ゆったりと家族で
 過ごせる
 うみとそらのおうち

一般社団法人
北海道こども
ホスピスプロジェクト

学習支援



学びの意欲向上



子どもとして必要な学びや
 遊び、体験、人とのつながりを
 享受できる機会を増やす

病気とともにある子どもやそのきょうだいは、ついつい色々なことを我慢しがち。まずは遊びや体験の支援から取り組みました。キャンプやゲームを通して、その子らしさが自然と出てくる、そんな機会づくりを家族と一緒に取り組みました。

北海道にこのような
 場所を作ろうとしています

北海道こどもホスピス
 プロジェクト

こども + ホスピス =

病気と共に生きるこどもが
 こどもとして、当たり前のことを
 当たり前にできる居場所。

